

青森県深浦方言地域における 幼児の特殊拍の発音傾向と意識

Articulation and Awareness of Syllabic Morae in case of Young Children in Hukaura

嵐 洋 子
ARASHI Yoko

キーワード

[シラビーム方言] Syllabeme dialect ・ [特殊拍] Syllabic morae

[拍感覚] Sensibility of mora ・ [幼児] Young children ・ [アクセント] Accent

I. はじめに

本稿は2002年9月に青森県西津軽郡深浦町で行った幼児の特殊拍（1）の意識と表記習得との関係を調べた調査（嵐 2003）から、5才から6才までの幼児5名の録音資料を分析し、特殊拍の発音傾向と意識の分析を試みたものである。

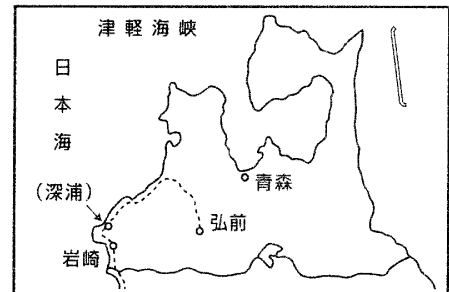
深浦方言は、シラビーム方言の一つと言われ、語を区切る時にモーラにまで割れないとされてきた。このような方言話者は、例えば「ホンヤ」も「マッチ」も2単位と数えるなど、特殊拍の独立性が弱く、かな文字との対応も薄い。しかしながら、共通語化が進む現在のシラビーム方言地域にいる幼児が、どのように特殊拍を意識し、発音しているのか調査したものはあまり見当たらない。共通語の影響で特殊拍が以前よりも独立している可能性も高い。

特殊拍の表記は、第二言語としての日本語習得において困難な場合が多い。それに対し、東京を始めとしたモーラ方言話者が持つとされる「拍感覚」の不足が原因だと述べているものがあるものの（水谷1994;山本・萩野・浅井・吉田1996等）、そのモーラ方言話者がいつ、どのように「拍感覚」を身につけるのかはまだ明らかではない。本稿では、シラビーム方言地域における特殊拍の発音と意識の変化を調べることで、幼児がどのように「拍感覚」を身につけていくのか、その過程を知る一つの手掛かりとし、第二言としての日本語教育へ応用するための基礎的な研究としたい。

Ⅱ. 調査

1. 調査地点とインフォーマント

調査地点の青森県西津軽郡深浦町は青森県西南部に位置し、日本海に面した小さな漁港である。調査は、深浦町にある私立保育園で行った。前述の、幼児の特殊拍の意識と表記習得との関係を調べた調査（嵐 2003）では、12名の幼児を対象としたが、本稿では、その中から、5名の幼児を分析対象とした。5名の幼児とは以下の通りである。



土岐（1977）

表1 インフォーマント概要

	性別	月齢	家族構成と出身地				
			父	母	祖父	祖母	兄弟の有無
JS3	男	6;5	深浦町	深浦町	深浦町	深浦町	無
JS10	男	6;2	深浦町	鯨ヶ沢町*	深浦町	深浦町	無
JS5	女	5;8	深浦町	鶴田町**	深浦町	深浦町	兄(10)・姉(7)
JS4	男	5;7	深浦町	深浦町	深浦町	深浦町	無
JS12	男	5	深浦町	深浦町	深浦町	深浦町	姉(19)・兄(16)・兄(14)

*鯨ヶ沢町＝西津軽郡鯨ヶ沢町

**鶴田町＝北津軽郡鶴田町

2. 調査方法及び調査語彙

嵐（2003）では、幼児の特殊拍の意識を調べるために、スタンプ法（大竹2000）という方法を用いた。スタンプ法とは、四角い枠目をプリントした紙を用意し、幼児に絵又はCDで語彙を与え、その語がいくつからできているか、音の塊を考えさせ、その語を言いながら、塊の数だけ枠目内にスタンプを押印させる調査方法である。調査は、保育園の一室を借りて行い、DATにより録音した。本稿ではその調査のうち、幼児が絵を見て、その絵が何の絵か答え、更にその答えを言いながらスタンプを押して分節している際の録音資料を分析した。又、調査中に得られた談話資料も参考にした。

表2 調査語彙

調査語彙は、促音、長音、撥音を含む語、各3語、及び、特殊拍を含まない語（ダミー）、2語、の計11語である。特殊拍を含む語は、全て3拍2音節のものである。

CV	撥音	長音	促音
マド	ゴハン	トケイ	ティッシュ
クツシタ	ダンゴ	チーズ	ラッパ
	ホンヤ	スモウ	マッパ

3. 分析方法

発音に関しては、弘前市における特殊拍の発音傾向を調査した渡邊（1994）を参考に、筆者（神奈川県横浜市出生）により、特殊拍がシラビーム方言として顕著に短く発音されている場合（S）と、ほぼモーラ方言におけるのと同様に発音されている場合（M）、顕著に短くはないが、モーラ方言よりは短い場合（△）の3種類に分けて分類を行った。渡邊も述べているとおり、このような分類は主観的な判断の息を出ないとも考えられるが、モーラ方言である筆者の印象は実感に則しているとも言える。

また、全ての語彙に関して、アクセントの分析を行った。分節に関しては、スタンプ法の結果により判断した。

4. 結果

（1）発音傾向

表3に、特殊拍の発音傾向と分節数を示した。全体的にシラビーム方言として顕著に短く発音された例は少ないが、JS10においては、「マッチ」「トケイ」が顕著に短く発音されていた。又、JS12は、シラビーム方言ほど短くはないが、モーラ方言よりは短い発音があった。一方、JS3やJS4はほぼモーラ方言と同様の長さで発音されており、発音にはかなり個人差があると言える。

表3 特殊拍の発音と分節傾向

	調査語彙	JS3	JS10	JS5	JS4	JS12
促音	ティッシュ	M(2)	M(2)	M(2)	M(2)	M(2)
	ラッパ	M(2)	M(2)	M(2)	M(2)	△(2)
	マッチ	M(2)	S(2)	M(2)	M(2)	△(2)
長音	トケイ	M(3)	S(2)	M(3)	M(3)	△(2)
	チーズ	M(3)	M(2)	M(3)	M(2)	M(2)
	スモウ	M(3)*	△(2)*	△(2)	M(2)*	△(2)**
撥音	ゴハン	M(3)	M(2)	M(3)	M(3)	M(2)
	ダンゴ	M(3)	M(2)	M(3)	M(3)	M(2)
	ホンヤ	M(3)***	△(2)***	M(2)	M(3)***	△(2)

（注）M=モーラ方言と同様の長さで発音された場合。

S=シラビーム方言として顕著に短く発音された場合。

△=顕著に短くはないが、モーラ方言よりは短く発音された場合。

(3) =スタンプ法で、3つに分節されたという意味。

米印はそれぞれ、幼児が* = 「オスモウ」、** = 「オスモウサン」、*** = 「ホンヤサン」と答えたことを意味。

ただし、分節数はそれぞれ「スモウ」、「ホンヤ」の部分を示す。

（2）分節の結果と発音

同じく表3の結果を見ると、シラビーム方言（S）として顕著に短く、或いはやや短く発音している（△）にも関わらず、特殊拍を1拍と数えている例は見られない。一方、発音としてはモーラ方言とほぼ同様の長さで発音されているが、特殊拍を1拍としていない例は多く見られた。両者の場合とも、方言が要因なのか、それとも言語発達上の問題なのか、今回の

調査だけでは断定できないが、シラビーム方言的な要素が残っている幼児の方が、特殊拍を1拍と分節していない傾向は見られた。

(3) アクセントの傾向

表4にアクセントの傾向をまとめた。基本的に、昇り格で、特殊拍を含めた1音節が高い結果になった。ただし、「ティッシュ」「チーズ」は、全員、「高高低」で発音されていた。又、「マッチ」に関しては、「低低高」(又は「低高」)と「高高低」の両方が見られた。又、「ラッパ」「トケイ」「(オ)スモウ」「ホンヤ」においては、低く平らな形(「低低低」)が見られた。

表4 特殊拍のアクセントの傾向

●=高 ○=低

	調査語彙	JS3	JS10	JS5	JS4	JS12
促音	ティッシュ	●●○	●●○	●●○	●●○	●●○
	ラッパ	○○●	○○○	○○●	○○●	●(●)○
	マッチ	●●○	○○●	○○●	●●○	○(○)●
長音	トケイ	○●●	○○	○○○	○●●	○●(●)
	チーズ	●●○	●●○	●●○	●●○	●●○
	スモウ	○○●●	○○●(●)	○●(●)	○○○○	○○●(●)○○
撥音	ゴハン	○●●	○●●	●○○	○●●	○●●
	ダンゴ	○○●	○○●	○○●	○○●	○○●
	ホンヤ	○○○●●	○(○)○●●	○○○	○○○●●	○(○)○

(注) 丸の数は、発音傾向の結果に基づき、(S)と判断したものは2つ、(M)と判断したものは3つ、(△)と判断したものは()に入れて示している。丸が三つ以上あるものは、「ホンヤサン」のように、何か言葉が付け加えられて発音された場合で、詳しくは、表3の注を参照。

5. 分析

(1) 発音傾向

前述の通り、促音、長音、撥音全てにおいて、顕著に短く発音する例はほとんど見られなかった。土岐(1977)では、深浦で言語形成期を過ごした筆者及びその家族に対し、なぞなぞ式質問によって得られた音声資料(録音テープ)及び筆者の内省を中心に、4世代の音節意識について報告している。4世代とは、A(明治26年生)、B(明治42年生)、C1(昭和10年生)、D(昭和33年生)であるが、調査の結果、D世代から、促音、長音、撥音とも明瞭に現れていることを報告している。今回、調査対象とした幼児の親は、ちょう土岐(1977)のD世代にあたる。このような親のもとに育ち、テレビなどから共通語の影響を多く受けている幼児が、特殊拍を1拍の長さで発音している傾向は、驚くべきことではない。

一方で、シラビーム的要素を残している幼児もいた。例えば、JS10は、「マッチ」を[matɕi]、「トケイ」を[toge]と、かなり短く発音していた。後者の「トケイ」ではカ行音が濁音化(2)している。JS12においては、JS10ほど短くないものの、モーラ方言と比べると短く感じるものがあつた。「ホンヤ」は、分節の際も[hō.ja]となり、撥音が独立して存在し

ていないことを示している。このような個人差がどのようにできるのかは明らかではないが、顕著に短い発音をしたJS10の場合、調査後に行ったインフォーマントの両親へのアンケートによると、調査した5名の両親のうち、JS10の親だけが絵本を普段話している方言で読んで聞かせると回答した(3)。このように、親が普段子供と接する時にどのような言葉を使っているかは、幼児の発音にも影響を与えられ、幼児の言語環境を更に調査する必要がある。

又、語彙によって、シラビーム的な発音が残る場合も考えられる。例えば、JS5の自然談話において、「オネエチャン」は[onetɕʰan]と発音され、長音が明瞭ではなかった。このように、普段よく家庭で使われているものには、以前より使われているシラビーム方言的な発音が残る可能性がある。先述の土岐(1977)も、長音が明瞭に現れているD世代であっても、「お父ちゃん」、「お母ちゃん」のような日常的な語彙では、[ototʃāŋ][okatʃāŋ]のように、長音の現れ方が明瞭ではないと述べている。

今回は調査に用いられた語彙を中心に記述したが、5～6才の幼児であれば、話す相手や場面によってコードスイッチングをしている可能性も考えられる(友定2002)。今後は調査場面だけでなく、幼児同士の会話や、家庭での会話も記述する必要がある。

(2) 発音傾向と分節

促音に関しては、発音が短いかどうかに関係なく、全員1拍と数えていなかった。促音は、シラビーム方言話者に限らず、モーラ方言話者でも、撥音や長音に比べると、1拍と数えるようになるのは遅く(Arashi 2002a, b, 嵐2003)、これが方言的要因かどうかは今回の調査だけでは分からない。

長音と撥音に関しては、前述の通り、シラビーム方言として顕著に短く(S)、或いはやや短く発音している(△)のにも関わらず、1拍と数えている例は見られなかった。一方、発音としてはモーラ方言と同様の長さで発音しているが、特殊拍を1拍と分節していない例は多く見られた。この結果に関して、方言が要因なのか、それとも言語発達上の問題なのかは、今回の調査だけでは断定できないが、JS10やJS12のように、シラビーム方言的な要素が残っている幼児の方が、特殊拍を1拍と分節しない傾向は見られた。特にJS10は月齢が高いわりに、特殊拍を1拍と分節しておらず、方言の影響を受けている可能性が高い。一方、シラビーム方言的な要素があまり見られなかったが、特殊拍を1拍と数えていない幼児に関しては、今後、1拍と分節するようになるのではないだろうか。この点に関しては、縦断的な調査を行い、分析中である。また、改めて報告したい。

(3) アクセントの傾向

深浦アクセントの特徴は、青森や弘前と異なり、低く平らな形を備えていること、又、起伏式アクセントでは、語中の一音節だけが低いことである(土岐1977, 1999)。しかし、特殊拍の中途にはアクセントの変わり目が来ることがないので、このようなアクセントの側面からも特殊拍が音節として独立していないことが述べられている(土岐1977)。又、起伏式の場合

合、東京アクセントのように、どこから下がるかではなく、どこから高くなるかが重要な「昇り核」に分類される（上野1977）。

今回の調査でも、特殊拍の中途にアクセントの変わり目が来ることはなかった。例えば、「ホンヤサン」も「○○○●●」であり、「サン」の部分がまとまって高くなっている（JS3、JS10、JS4）。又、「ダンゴ」は5人全てが「○○●」であり、「ゴ」の部分だけが低い。アクセントの側面においては、未だに特殊拍の独立性が低いことが言える。

又、「チーズ」「ティッシュ」は全員「●●○」で発音されていた。これらの語は比較的最近入ってきた語であると思われる。又「マッチ」に関しては、「○○●」と「●●○」の2種類の発音が見られた。この「マッチ」に関し、絵を見てもなかなか分からない幼児（JS3、4）は「●●○」、絵を見てすぐに分かった幼児（JS5、JS10）は「○○●」と発音していた。アクセントにおいても、その語の使用頻度や馴染み度などが、影響を与えると思われる。

Ⅲ. まとめと今後の課題

本稿では、シラビーム方言地域とされる青森県深浦方言地域に住む5才から6才までの幼児5名の録音資料を分析し、特殊拍の発音傾向と意識の分析を試みた。その結果、促音、長音、撥音全てにおいて、特殊拍が顕著に短く発音される例は少なかった。しかしながら、シラビーム方言的な要素を残し、特殊拍を短く発音している幼児も見られ、深浦地域の幼児のシラビーム性にはかなり個人差があると思われる。又、アクセントの側面から分析すると、特殊拍の中途にアクセントの変わり目が来ることはなく、未だに特殊拍の独立性が低いことが分かった。

特殊拍の分節結果と発音を比べてみると、長音と撥音において、発音としてはモーラ方言と同様の長さで発音されているが、特殊拍を1拍と分節していない例は多く見られた。一方、シラビーム方言として顕著に短く、或いはやや短く発音しているのにも関わらず、1拍と分節している例は見られなかった。このことから、特殊拍を1拍の長さに発音することと、1拍と分節することとは、必ずしも一致するとは言えないが、何らかの関係があることを示唆している。また、特殊拍を1拍と分節する幼児が見られることは、この地域における特殊拍の意識が以前に比べて明瞭に存在することが考えられる。このように、音韻体系の変化と特殊拍の意識の変化が関係していることは興味深い。

今回は、調査語彙もインフォーマントの数も少なく、断言できることはまだ少ない。分析方法も、主観的な判断によるもので、確実なものとは言えない。シラビーム方言的だと判断したものの中にも、幼児の言語発達上の発音も含まれている可能性もある。また、前述のとおり、幼児でも場面や話し相手によって、コードスイッチングしている可能性があり、今回のような1対1の調査場面だけではなく、幼児同士の会話や、家庭での会話なども調査する必要がある。以上のような問題点があるものの、幼児がどのように「拍感覚」を身につける

のか追求した研究はまだ乏しく、幼児の特殊拍の発音傾向と意識を調べた本研究は、意義のあるものと思われる。今後は更に研究方法を改善し、幼児がどのように「拍感覚」を身につけるのか、明らかにしていきたい。

注

- (1) 何を特殊拍とするかは議論が分かれており、長音・促音・撥音以外にも二重母音や母音が無声化した「かすれる拍」なども特殊拍の一種とする説もある（松崎1996）。本研究では、とりあえず代表的なものとして長音・促音・撥音を特殊拍として扱う。
- (2) 濁音化とは、「カ行」、「タ行」子音が[k][dz][d]となって現れる現象で、東北全般に見られる。JS10は、その他にも、[nego]（猫）、[kogo]（ここ）など、はっきりとした濁音化が多く見られた。
- (3) 調査後に行った両親へのアンケートの内容と結果は以下の通りである。

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
JS3	2	1	3	1	3	1	2	2	2	1~3
JS10	2	3	3	1~2	3	2	3	3	3	3
JS5	1	3	2	1	2	3	2	1	1	3
JS4	1	3~4	2	1	2	1	2	1	1	3
JS12	1	2~3	1	1	1	1	3	1	1	1,3

<アンケートの内容>

- 1 よくテレビを見ますか？
 - ① 毎日必ず見ている。
 - ② 毎日ではないが、好きな番組をよく見ている。
 - ③ たまに見る程度。
 - ④ 全然見ない。
2. 1日に平均、何時間位テレビを見ますか？ （ ）時間位
3. 本やマンガをどれ位見ますか？
 - ① 毎日見ている。
 - ② 毎日ではないが、よく見ている。
 - ③ 買ってあげた時だけ見る程度。
 - ④ 全然見ない。
4. お子様のために、一ヶ月、平均何冊位、絵本（雑誌や漫画も含む）を買っていますか？
（ ）冊位
5. どれ位、絵本を読み聞かせていますか？
 - ① 毎日読んであげる。
 - ② 毎日ではないが、よく読んであげる。
 - ③ たまに読んであげる程度。
 - ④ 全然読まない。

6. 読み聞かせる時は、標準語を使いますか？それとも、普段話している言葉を使いますか？
- ① 標準語
 - ② 普段の言葉
 - ③ 両方
7. ご家庭で積極的に文字を教えていますか？
- ① 積極的に教えている。
 - ② 時々、教えている。
 - ③ あまり教えていない。
 - ④ 全く教えていない。
8. 日ごろから文字に興味を示していますか？
(他の人の真似をして書いてみる、手紙を書くなど)
- ① とても興味を示している。
 - ② 少し興味を示している。
 - ③ あまり興味を示していない。
 - ④ 全く興味を示していない。
9. おじいさんやおばあさんとよく話をしたり、遊んだりしますか？
- ① よくする
 - ② 時々する
 - ③ あまりしない
 - ④ 全くしない
10. 普段、外で遊ぶことが多いですか？家の中で遊ぶことが多いですか？
- ① 外で遊ぶ
 - ② 家で遊ぶ（主にテレビゲームなどのゲーム）
 - ③ 家で遊ぶ（テレビゲーム以外）

参考文献

- Arashi, Y. (2002 a) 'Research on the Acquisition of Kana Writing with Special Morae in Japanese Young Children- from the Perspective of Phonological Awareness — '
平成14年度 横浜国立大学大学院 修士論文
- Arashi, Y. (2002 b) 'Research on the Acquisition of Kana Writing with Special Morae in Japanese Young Children' JABEAT Journal 6 : 91-109.
- 嵐 洋子 (2003) 「幼児の特殊拍の意識と表記習得に関する研究～シラビーム方言とモーラ方言の比較を中心に～」第11回社会言語科学会大会予稿集.
- 此島正年 (1986) 「青森県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一（編）『講座方言学 4 北海道・東北地方の方言』国書刊行会.
- 友定賢治 (2002) 「方言の習得」江端義夫（編）『朝倉日本語講座10 方言』朝倉書店.
- 松崎寛 (1996) 「日本人の『音節』と『拍』の知覚 — 外来語聴取実験を通じて — 」
東北大学文学部日本語学科論集 第6号 : 81-92.

- 水谷信子（1994）『実例で学ぶ誤用分析の方法』アルク.
- 大竹孝司（2000）「幼児の心内辞書におけるかな文字の獲得とモーラの認識」
日本言語学会第120回大会予稿集：30-35.
- 土岐哲（1977）「青森県深浦方言における音節意識 — いわゆる特殊音節を中心として — 」
『国文学研究』62号：89-101.
- 土岐哲（1999）「青森県深浦方言の音声・音韻－4世代の横断的内部観察資料から－」『国文学
研究』128集.
- 上野善道（1977）「日本語のアクセント」『講座日本語 音韻』岩波書店.
- 渡邊修平（1990）「弘前市における特殊音節の識別について」『弘学大語文』16：1-11.
- （1994）「弘前市多人数調査にみる特殊音節の発音傾向 — 若年層・壮年層・高年層
を比較して — 」『弘学大語文』vol.20：84-91.
- 山本紀美子、萩野誠人、浅井清子、吉田絹子（1996）『子供のための日本語教育』アルク.